

## コーヒーと髭が醸し出すデューイ的人間形成の実相 Coffee and Beard: The realities of Deweyan human development

伊藤博美\*

Ito Hiromi\*

キーワード：コミュニケーション、探究、討論、アート、デューイ

Key words: communication, inquiry, discussion, art, Dewey

大学の同じフロアに早川操先生の研究室があるという環境は、私が名古屋大学大学院の院生・研究生であったときと、梶山に着任してからである。耐震工事前の名古屋大学教育学研究科（現・教育発達科学研究科）教育原論講座（現・人間形成学領域）の院生は、名古屋大学教育学部の南側校舎三階西側の奥から手前二番目にあった先生の研究室の前を通り、最も奥の北側にある講座の資料室で、最先端のアップル社のPCでインターネットに接続したり、資料を読んだりしていた。先生の研究室からは、不在時以外は常に話し声が聞こえていたように記憶している。先生は時折資料室をのぞかれ、「コーヒー飲みますか〜」と院生に声をかけて振る舞ってくださった。中庭の桜の下でBBQをしたり、集中講義の講師の先生が驚かれるほど居酒屋のテーブルに料理が並んだり、ご自宅にお邪魔させていただいたりというコミュニケーションの本質は、現在の研究室のドアに書かれたメッセージを拝見すると、梶山に移られてからも変わっておられないのだろう。そうして現在も先生から、時折私の研究室にお立ち寄りくださり、私の研究の不備な点、大学運営において留意すべき点など、短い雑談のなかで、そっと重要な点をご指摘くださる。こういう環境の贅沢さを認識していなかったことを、今更ながら悔やんでいるところである。

さて早川先生との出会いは、1994（平成6）年に私が名古屋大学大学院に「入院」したときである。翌年のゼミナールでD. スローンの *Insight Imagination* を講読したのだが、英語も苦手な知識も無く文脈も理解できない私の迷訳珍訳に、先生は髭に触れながら苦笑されていた。私が博士課程後期課程に進学した、1997年度後期の先生の「教育学II」という授業では、次の文献講読が計画されていた。

西尾幹二『教育と自由』／岩田龍子『学生たちが目を輝かすとき』／森田・藤田他『教育学年報Iー教育研究の現在』／T. クーン『科学革命の構造』／プラトン『饗宴』／N. ノッディングズ『ケアリング』／P. フレイレ『被抑圧者の教育学』

／I. イリッチ『脱学校の社会』／K. ホーナイ『現代の神経症的人格』／E. エリクソン『自我同一性』／ボウルズ&ギンティス『アメリカ資本主義と学校教育』／P. ウィリス『ハマータウンの野郎ども』／A. S. ニール『問題の子ども』／J. デューイ『学校と社会』／O. F. ボルノー『教育を支えるもの』／H. エレンベルガー『無意識の発見』／N. チョドロウ『母親業の再生産』／M. ラター『母性剥奪理論の功罪』／伊藤公雄『男性学入門』／メンズセンター『男らしさから自分らしさへ』／井上・上野他編『セクシュアリティ』／中村雄二郎『臨床の知とは何か』／河合隼雄『臨床教育学入門』

後期課程から早川操先生にご指導をお願いしたのだが、この計画を改めて見て驚いたことは、これら文献の幅広さだけでなく、私がずっと追いかけている、アメリカの教育哲学者ノッディングズ（現在はノディングズと表記）とここで出会っていたということである。人は何をもって正／不正や善悪を判断するのかという学部生時代から抱えていた問題について、アメリカの発達心理学者L. コールバーグとC. ギリガンの道徳性発達段階論においてそれぞれ示された、正義とケアの倫理に私は着目した。1980年代前半に、ギリガンやノディングズは、従来の社会が男性の経験に基づく価値を志向していたことに対し、「もう一つの」価値を志向する発達や教育を提唱し、正義対ケア論争という論争を招いた。この論争は日本でも学問領域を越え展開されたが、先生がノディングズに着目されたのは、E. エリクソンが成人の発達課題として示した、他者をケアする姿勢や態度の涵養が困難な日本の状況にもあったと推察される<sup>1)</sup>。そして1998年度のゼミナールでは、邦訳の無かった『学校におけるケアの挑戦 (*The Challenge to Care in Schools*)』（1992）をテキストにしてください。

同書でノディングズが示したケアの諸対象は同心円構造で配置されている（図1）が、先生は「ケアする共同体としての学校や家庭の実現をめざすからには」<sup>2)</sup>必要であろうと、

\* 梶山女学園大学教育学部

2021年11月9日受付

「集団・組織・共同体などに対するケア」を加え、「ケアの多重的同心円構造」<sup>3)</sup>として曼荼羅のような形で図示された(図2)。後にノディングズは自身がその理論を継承しているとするアメリカの哲学者J. デューイに論拠を得て「学校は民主主義的に、連合した生活の最良の形態が実践される場として組織されるべきである」<sup>4)</sup>と、集団間の相互作用や交流の意義を訴えている。これは一例にすぎないが、このような先生の先見の明は、デューイとそれに関連した研究への精通にある<sup>5)</sup>と考えられる。とはいえ先生は、院生の関心や研究の対象についてまずご自身が探究されるも、自身の知見もデューイ研究も押しつけることなく、院生それぞれに探究への道を拓いてくださった。長く「入院」していた私だけでなく、ケアされた院生は、コーヒー調達係だった(?)人間関係学部の藤原直子先生はじめ、東海地方を中心に高等教育に従事し、ケアの連鎖を展開している。

2021(令和3)年1月の中央教育審議会答申「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」は、「個別最適な学びが孤立した学びに陥らないよう……協動的な学びを充実することも重要」(概要2頁)としている。先生はデューイを基に早くから「意味ある状況を創り、経験の意味を拡大させ、[向かい合う二人の人間の]二つの経験を融合する」「コミュニケーションに基づいた、初等・中等・高等教育の一貫した形態」の構想の必要性<sup>6)</sup>を示唆された。また「討論(discussion)というアートは……リーダーとフォロワーという役割の交換を通じてさまざまな意味を共有し、それらの意味の豊富化をめざすとき、それはひとつの教育的経験である」<sup>7)</sup>と先生は述べている。教師と子ども、子ども同士、ま

た教師同士、さらに保護者や地域の人々も加わり、コミュニケーション的な探究や討論というアートが、これからの学校でどう展開されるか、デューイの如く末永く先生には、髪に触れつつ日本の教育学界に討論を投げかけ、コミュニケーション的な探究を実践していただきたい。

注

- 1) 早川操(1997)「「きずな・ケア・自尊心」を育む人間関係空間の意義再考—デューイのコミュニケーション論が示唆するもの—」『日本デューイ学会紀要』第38号, 178頁参照。
- 2) 早川操(1999)「「ケアリングマインド」育成のための教育理論とその課題」『名古屋大学教育学部紀要(教育学)』第45巻第2号, 95頁。
- 3) 同上。
- 4) ネル・ノディングズ著, 宮寺晃夫監訳(2006)『教育の哲学』世界思想社, 64頁。
- 5) 日本デューイ学会会長を2010年から2016年まで歴任されたことにも象徴されよう。
- 6) 早川(1997), 179頁。早川操(2020)「わが国におけるデューイ探究学習の受容と変遷」, 「あとがき」日本デューイ学会(編)『民主主義と教育の再創造』13-22頁, 319-322頁参照。
- 7) 早川操(1994)『デューイの探究教育哲学—相互成長をめざす人間形成論再考—』名古屋大学出版会, 16頁。

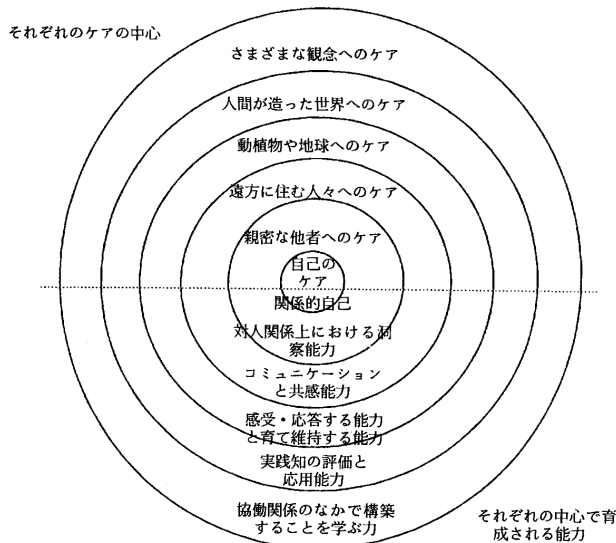


図1 ケアの同心円構造  
出典：早川(1999) 93頁

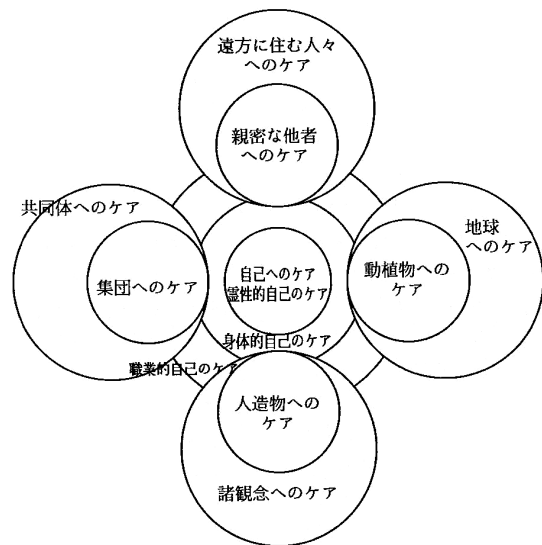


図2 ケアの多重的同心円構造  
出典：早川(1999) 95頁